

# 奄美群島超高齢者の「老年的超越 (Gerotranscendence)」 形成に関する検討

## —高齢期のライフサイクル第8段階と第9段階の比較—

富澤 公子\*

Masami TAKAHASHI \*\*

本研究の目的は奄美群島超高齢者を対象に、Tornstam 及び J. Erikson の論考にある「老年的超越」をキー概念に、加齢に伴う超高齢期の心理的適応について検討することである。そのため、奄美群島の高齢者を2段階（ライフサイクル第8段階：高齢期、第9段階：超高齢期）の発達段階に分け考察した。結果、超高齢期は高齢期と比べて身体機能は低下し老い観は高まるものの、生活満足度や地域愛着度などの心理的適応は高い状態にあった。因子分析からは「宇宙的超越」、「自我超越」、「執着超越」の3次元が導かれ、カイ二乗検定からは、高齢期は「自我超越」項目が有意に高く、超高齢期は「執着超越」項目が有意に高いという結果であった。2段階の差を  $t$  検定した結果においても「自我超越」は高齢期で有意に高い得点を示し、「執着超越」は超高齢期で高い得点を示した。また重回帰分析からは、高齢期は「老い観」が高いほど「執着超越」は高くなり、超高齢期では「時間展望」が狭まるほど「執着超越」は高くなるという関連が示された。これらの結果から、「老年的超越」は加齢とともにある種の要素の影響を受け、高齢期と超高齢期では異なる形成が明らかとなった。

キーワード：老年的超越 (Gerotranscendence)、奄美群島、ライフサイクル第9段階、超高齢者、  
発達課題

### I 本研究の背景・目的

昨今、高齢期の長期化により障害を伴う時期もより高年齢に移行し、高齢者区分においては、65歳以上の高齢者を前期高齢者 (young old)、75歳以上の高齢者を後期高齢者 (old

old) とする2区分から、85歳以上を超高齢者 (oldest old)<sup>1)</sup>、さらに100歳以上の高齢者は百寿者 (centenarian) の呼称が一般化している<sup>2)</sup>。

特に人口が増加傾向にあるのはこの85歳以上の超高齢者 (oldest old) 層であり、Baltes (2002) はこの時期を心身の衰えが特徴となる高齢期本番の時期と位置づけた。さらに超高齢者の増加現象は先進諸国に共通するものであり、特に日本では女性の平均寿命が86.05歳 (2009) と既に超高齢者の域に達している。わが国の介護保険認定者の割合においても、後期

\* 立命館大学大学院社会学研究科研修生

\*\* ノースイースタン・イリノイ州立大学心理学部准教授

高齢者の約30%に対して、超高齢者においては50%を上回っている(厚生労働省, 2006)。

総じて、超高齢期は生物学的にも社会的にもネガティブな要素が出現する時期であると言われる。Baltesら(2002)のベルリンマックスプランク研究所における加齢研究(Berlin Aging Study)からは、超高齢者の約80%は多重障害を経験し、90歳代では約半数の人に何らかの痴呆症状が認められている。認知機能面の低下、満足感の低下、孤独感の増加などの状態から、サードエイジ(young old)の高齢者はサクセスフル・エイジング(幸せな老い)の世代であるが、フォースエイジ(oldest old)の超高齢者は人間としての尊厳を保つことが困難となる世代と論じ、前期・後期高齢者とは異なる特徴を持った集団であることを指摘する(Baltes & Smith, 2002)。

一方で、超高齢者の身体機能と心理的適応の関連を調べた研究からは、客観的機能側面の低下にかかわらず主観的幸福感は低下しないことが確認され、超高齢期は主観的心理側面に影響する要因が前期・後期高齢者と異なることが示唆されている(権藤ほか, 2005)。

しかしながら、超高齢期の心理適応研究の数は少なく(佐藤, 2003)、超高齢期の心理的理解は十分に解明されていない現状がある(秋山, 2008)。多くの人が超高齢期という新たなライフステージを迎えることになった今日、長くなった人生といかに向き合っていくのかの問いに答える研究は重要な課題になっていると考える。

ところで、Erikson (Erikson E. H., 1965)の心理社会的発達段階説では、人生の各段階にはそれぞれ異なる発達課題があるとされる。高齢期はライフサイクルの最終段階の第8段階に位

置し、そこでの発達課題は統合対絶望であり、それを導く力は叡智である。

しかしながら、J. Erikson 自らが超高齢期に達し、夫、E. Erikson の死後、ライフサイクル論に第9段階を追加し(Erikson&Erikson, 1997)、第8段階の「統合」とは異なる発達課題として、「老年的超越」(Gerotranscendence)という概念を提示した。彼女は、「80歳代や90歳代になると、それまでとは異なる多くの新たな困難や喪失体験、自分自身の死の扉がそう遠くないことを感じるに至る。これらの新たなニーズに的確に取り組むためには、これらの喪失を生き抜く確固とした足場として、人生の出発点で獲得した基本的信頼感という恵みが人には与えられている」と論じる。そして、第9段階のさまざまな失調要素を甘受することができる人は、「老年的超越」に向かう道に前進すると示唆するのである。しかしながら、これらの示唆はJ. Erikson 自身の体験と推測によるもので、実証研究から導かれたものではない。

J. Erikson (1997)が第9段階の課題とした「老年的超越」<sup>3)</sup>(Gerotranscendence)は、Tornstam (Tornstam L., 1989)が提唱した「老年的超越」理論に基づいている。「Gerotranscendence」という用語は造語であり、ギリシャ語の geron (老人)と英語の transcendence (超越)の合成語である。彼は、高齢期の適応理論であった離脱理論を再定式化して、生活満足の問題を物質的・合理的な観点から宇宙的・超越的な観点へのメタ・パースペクティブな変化ととらえ、「老年的超越」理論を提示した。

Tornstam は、「老年的超越」理論は、西洋の哲学や東洋の禅の思想に支えられていると述べ、禅者が修行を通じて別次元の世界、超越的

世界観に生きるように、人はエイジング（加齢）の過程で意識することなく、禪者に近い感覚に到着すると推定する。また、この過程は様々な体験によって妨害されたり促進されたりして、その結果、異なったレベルの「老年的超越」が生じると論じている。発達論的視点からは、Jung の人生の後半期における「個性化プロセス理論」と同じように、「老年的超越」は成熟や叡智へ向かう発達の最終段階と見なされる (Tornstam, 1989)。彼はさらに、「老年的超越」理論は、高齢者一般に対するネガティブな見方（惨め、孤独、衰退）や過度な期待感（役割期待、資源性）と実際の高齢者の思い（孤独ではない、高い生活満足度、高齢期の発達）との認識のズレ、ミスマッチから出発していると説明する。我々は高齢者の行動を、「社会からの離脱」と簡単に決めつけてしまうのではなく、「老年的超越へと向かうポジティブな発達」であることに注目すべきと主張するのである (Tornstam, 2005)。

Tornstam はインタビュー調査の結果を基に作成した「老年的超越」尺度を用いて実証研究を重ね、「老年的超越」を構成する次元として、万物の魂や宇宙との親交の感覚の増大などの「宇宙的」次元、自己中心性の減少や自己超越などの「自己（内的一貫性）」次元、表面的なことへの関心の減少や一人を望むなどの「社会と個人の関係（積極的な孤独）」の3つの次元や徴候を導き出している (Tornstam, 1989)。

そして、「宇宙的超越」の兆候は成人期の中頃から年齢と共に増大し高齢期に最大の発達を迎えること、「積極的な孤独を望む兆候」は高齢期に最大を迎えるが、しかし成人期の前期にもっとも急激に発達すること、「内的一貫性の兆候」は青年期でスタートし、75-85歳で最大

を迎えその後は平行に推移することなど、加齢に関連した「老年的超越」の傾向を明らかにしている (Tornstam, 2005)。

富澤 (2009a) は Tornstam の最初の老年的超越尺度 (Tornstam, 1989) の日本語訳から独自の尺度 (GTS) を作り、奄美群島超高齢者を対象とした郵送調査から、時間や空間を超えた感覚としての「宇宙的超越」、自我意識の変容としての「自我超越」、物や表面的なものへの減少感覚としての「執着超越」の3つの次元からなる「老年的超越」形成を明らかにしている。このうち「執着超越」の次元は、Tornstam の研究 (Tornstam, 1994) からは現れなかった次元である。富澤 (2009b) は、奄美群島超高齢者へのインタビュー調査からも郵送調査と同じく3つの次元の「老年的超越」形成を確認している。そこから、奄美群島超高齢者のポジティブな生は地域や子どもとの絆に支えられた環境の中で、「百歳まで生きる」という意志が超高齢期の生きる目標となって「老年的超越」を形成することに言及している。

しかしながらこれまでの研究からは、前・後期高齢世代の老年的超越形成は明らかにされていない。加齢に伴って、高齢者がどのような心理適応を行い、「老年的超越」を形成していくのかの検証が求められるといえる。

そこで本稿では、加齢に伴う高齢者の心理適応を明らかにすることを目的に、高齢者のライフサイクルを第8段階：高齢期（前期・後期高齢者）、第9段階：超高齢期の2区分に分けた比較から「老年的超越」形成を考察し、J. Erikson の提示した第9段階の発達課題としての「老年的超越」を検討しようとするものである。

本研究における「老年的超越」の定義は、「高

齡期の喪失に対する適応として、高齢者に内在する諦念から現れる思考の発達であり、それは根源的に生きる意味を求める人間にとって死を意識する過程で形成される人生の神秘に対する謙虚で肯定的な思考である」と定義する。

なお本研究で奄美群島<sup>4)</sup>を選定した理由のひとつは、この地域が「長寿で子宝」ということがある。当地域は人口10万人当たりの百寿者の割合（粗百寿者率）が115.54人（2009）と沖縄県（67.44人）より高く、かつて泉重千代さん、本郷かまとさんなどの長寿者を輩出した長寿の島である。また合計特殊出生率も高く、全国市町村の上位3位を奄美群島市町村が占めており（2009）、現在、全国の先進的長寿モデルとして「あまみ長寿・子宝プロジェクト」が展開している。さらに、この地域は戦争中には空爆投下から壊滅的な被害を受け、終戦前後8年間は米国軍直轄下での辛酸な生活を体験し（藺，2004）、また豊かな自然環境に恵まれながらも自然の脅威（台風、ハブ）に晒される生活がある。このような危機体験をもつ奄美群島の高齢者は生きる意味を深く考える契機と体験を有しているといえ、高齢期、超高齢期の内面（精神）世界を解明するに適した対象と考えるのである。

## II 方法

### 1 対象者とデータ収集方法

**対象者：**本研究では奄美群島内の65歳以上の自宅居住高齢者を2段階に分け対象とした。第8段階の高齢者：65歳～84歳の前期・後期高齢者。第9段階の超高齢者：85歳以上の超高齢者とした。

**データ収集：**①第8段階：郡内3町村の生涯学習講座等受講生）176人（回収率100%）、平均年

齢74.4歳。なお、回答者の5歳区分の分布は概ね奄美群島の人口区分に比例している。②第9段階：郡内2町村の356人への郵送調査を実施。回答者102人（回収率28.7%）、平均年齢90.0歳。

### 2 時期

- ① 2009年6～7月3か所の講座等終了後に回収。
- ② 2006年4月～8月郵送調査

### 3 倫理的配慮

①の調査に関しては、講座実施者へプライバシー保護に関する誓約書を提出するとともに、調査票に調査目的以外で使用しない旨を誓約し、②の調査に関しては、回答者のプライバシー保護に関する誓約書を郵送時に添付し、調査目的以外で使用しない旨を誓約した。データは適切に管理している。

### 4 質問紙の構成及び分析データ

本調査で用いた質問紙は、基本属性、行動能力、心理的適応（生活満足感、地域愛着度、時間展望、現在の心境、楽しみごと、老い観）及び老年的超越に関する質問項目から構成した。分析はSPSS14.0で行った。

### 5 データの内容

#### (1) 基本属性

性別、年齢、居住年数、家族構成、暮らし向きは「大変苦しい（1点）」から「大変ゆとりがある（5点）」までの5件法、健康状態は「寝たきり（1点）」から「元気（4点）」の4件法、通院の有無は、「医者にかかっている（0点）」、「かかっていない（1点）」の2件法、介護認定は「認定外（0点）」から「要介護5（6点）」

までの7件法でたずねた。

## (2) 行動能力

行動能力は、老研式活動能力指標13項目を使用し、「はい(1点)」、「いいえ(0点)」でたずねた。

## (3) 心理的適応

地域愛着度について、「感じない(0点)から「どちらでもない(1点)」「感じる(2点)」の3件法、生活満足度について、「不満(1点)」から「大変満足(5点)」までの5件法でたずねた。

## (4) 楽しみごと

日中の楽しみごとについて、「テレビ・ラジオ」、「新聞」、「読書」、「デイサービス」、「病院・リハビリ」、「おしゃべり」、「散歩」、「ゲートボールなどスポーツ」、「カラオケ」、「趣味」、「講演会・観劇」、「その他」、「楽しみ事はない」などの13項目から複数回答可とした。

## (5) 現在の心境

高齢者の積極面を測定するため9項目の設問を用意した。「この年になるともう勉強することはない(反転項目)」、「いつまでも人に頼らないで生きていこうと思う」、「以前ほど自分をまじめだと思わない」、「同年齢の人と比べ元気な方だと思う」、「もっと世の中の動きや新しいことを知りたい」、「若い人が希望すれば経験談を話してもよい」、「もっと新しい出会いや新しい人間関係をつくりたい」、「何かできることがあれば社会の役に立ちたい」、「生きた証を子や孫に残したい」で、「思わない(0点)」、「そう思う(1点)」の2件法でたずねた。

## (6) 時間展望

未来志向性と関連する項目として、「来週」、「来月」、「1年後」の3区分から予定を考えることがあるかどうかを、「はい(1点)」、「いい

え(0点)」の2件法で回答を求めた。

## (7) 老い観

Tornstamの憂鬱尺度5項目の日本語訳(「孤独だと感じる」、「時間の経過が遅い」、「無視されている」、「余計者と感じる」、「老いたと感じる」)から、「はい(1点)」、「いいえ(0点)」の2件法でたずねた。

## (8) 老年的超越項目

老年的超越の尺度は、Tornstamの「老年的超越」の認識上の兆候・次元の特徴(Tornstam, 1987)から、日本語訳11項目を尺度として作成した。①「表面的なつきあいへの関心がなくなった」、②「物やお金に対する興味がなくなった」、③「若いときには気づかなかったささやかなことにも幸せを感じる」、④「自分は何かに生かされていると感じることがある」、⑤「自分のいい面も悪い面も全てを受け入れられるようになった」、⑥「物思いにふけることに幸せを感じるようになった」、⑦「過去の出来事がつい最近のように感じる」とある、⑧「離れた所にいる兄弟や子どもを近くに感じる」とある、⑨「亡くなった両親や祖父母への愛情が増してきた」、⑩「死に対する恐怖心がなくなった」⑪「若いときに比べ心が穏やかになった」の11項目であり、「はい(1点)」、「いいえ(0点)」の2件法でたずねた。

## Ⅲ 結果

### 1 基本属性

対象集団の基本属性等は、表1のとおりである。「平均年齢」は高齢者74.4歳、超高齢者90.0歳で、その差は16歳である。性別では高齢者は女性71%、超高齢者は女性64.7%とともに女性の比率が高い。

表1 対象集団の基本属性

項目		高齢者		超高齢者	
項目	区分	割合(%)	人数	割合(%)	人数
年齢	平均(SD)歳	74.4(±57.7)	176人	90.0(±4.0)	102人
性別	男	29.0	51	35.3	36
	女	71.0	125	64.7	66
家族構成	1人	27.1	45	39.4	39
	2人	50.0	83	28.3	28
	3人	13.3	22	22.2	22
	4人以上	3.6	16	10.1	10
居住年数	平均	45.5年		71.6年	
	中央値	39.0年		80.0年	
暮らし向き	大変苦しい	4.0	7	3.0	3
	やや苦しい	13.0	23	12.1	12
	普通	62.5	110	60.6	60
	ややゆとり	18.2	32	16.2	16
	大変ゆとり	2.3	4	8.1	8
通院	あり	27.8	49	75.8	75
	なし	72.2	127	24.2	24
健康状態	元気	68.2	120	40.0	40
	普通	26.1	46	39.0	39
	寝込み	3.4	6	10.0	1
	寝たきり	2.3	4	11.0	11
介護認定	認定外	97.3	171	47.5	48
	要支援	1.1	2	12.9	13
	要介護1	0.6	1	21.8	22
	要介護2以上	0.0	0	17.8	18
行動能力	平均(SD)	11.8(±1.9)		6.4(±4.5)	
	中央値	13		6.5	
合計			176人		102人

「家族構成」は高齢者の半数は「2人」、「1人」は27.1%である。一方、超高齢者は「1人」の比重が増えて39.4%、以下「2人」28.3%、「3人」22.2%となっている。

「居住年数」の平均は、高齢者は45.5年（中央値39.0年）、超高齢者は71.6年（中央値80.0年）で、高齢者との年齢差を考慮しても超高齢者の居住年数は高い。

「暮らし向き」は高齢者・超高齢者ともに、

「ゆとり」層20%台、「普通」層60%台、「苦しい」層は10%台である。「通院の有無」は、高齢者では「あり」は27.8%、反対に超高齢者では、「なし」が24.2%と逆転している。

「健康状態」では、高齢者の68.2%は「元気」、26.1%は「普通」で、94.3%は普通以上の健康状態である。一方超高齢者は、「元気」40.0%、「普通」39.0%で、高齢者よりやや低いものの全体の79.0%は普通以上と答えている。

「介護認定」の状況は、高齢者の97.3%は「介護認定外 (自立)」であるが、超高齢者は47.5%が「介護認定外 (自立)」であった。「日常の行動能力」(老研式活動能力指標13項目)では、高齢者の平均は11.8点、中央値は13点で、高齢者は満点に近い状態である。一方、超高齢者の平均値は6.4点、中央値は6.5点であり、満点又は満点 (12点・13点) に近い方が20%ある反面、0点・1点が20%あるなど、多様な状態を示している (図1)。

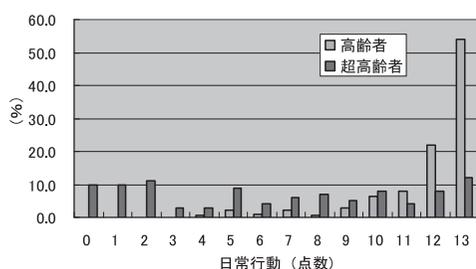


図1 日常行動高齢者と超高齢者の比較

これらの結果から、身体機能・自立・行動面では、高齢者と超高齢者の差は大きく、また、超高齢者間の差も大きいといえる。

## 2 心理的適応状況

### (1) 心理的適応

「生活満足度」及び「地域愛着度」にかかる心理適応の状況は表2のとおりである。

表2 心理的適応状況

項目		高齢者 (%)	超高齢者 (%)
生活満足度	大変満足	5.5	13.2
	満足	35.8	34.1
	普通	52.2	46.1
	やや不満足・不満足	6.5	6.6
地域愛着度	感じる	93.6	93.7
	どちらでもない	4.1	6.3
	感じない	2.3	0.0

「生活満足」は超高齢者に「大変満足」の割合が高く、「普通」以上をあわせると、93.4%にのぼる。高齢者も「普通」以上をあわせると、93.5%で、同様に高い。地域愛着度も高齢者・超高齢者ともに感じるは94%に上る。なお、超高齢者では感じないという回答は0であった。

### (2) 現在の心境

高齢期の現在の心境について9項目 (うち、「もう勉強することはない」は反転項目) でたずねた結果は表3のとおりである。全体に高齢者の回答は積極的で、それぞれの項目で70~80%近い肯定回答であった。各項目を Pearson のカイ二乗検定したところ、9項目のうち8項目で、高齢者の回答の方が有意に高い状況にあった。

なお、超高齢者の回答も率は下がるが、9項目中7項目で肯定回答が上回っている。総じて、高齢者は社会とのかかわりについて積極的

表3 現在の心境

項目	肯定	高齢者割合 (%)	超高齢者割合 (%)
いつまでも人に頼らずに生きていこう	そう思う	85.3	67.5
もう勉強することはない (反転項目)	そう思う	11.8	38.5
以前よりまじめとは思わなくなった	そう思う	37.1	38.0
同年代の人に比べて元気な方	そう思う	79.4	82.1
もっと世の中の動きを知りたい	そう思う	89.4	59.5
若い人に自分の経験を話しても良い	そう思う	80.6	60.5
新しい出会いや人間関係をつくりたい	そう思う	74.3	44.2
何か出来ることで社会の役に立ちたい	そう思う	83.5	52.6
生きた証を子や孫に残したい	そう思う	85.3	80.5

な考えを保持しているといえる。

表4 日中の楽しみごと

項目	高齢者 割合(%)	超高齢者 割合(%)
テレビ・ラジオ	74.4	65.0
散歩	48.3	43.7
おしゃべり	47.7	43.1
新聞	58.0	42.2
デイ・サービス	3.4	32.4
読書	34.7	26.5
趣味	31.3	25.5
スポーツ	28.4	16.7
病院	9.7	12.6
カラオケ・鳥歌	21.6	10.7
講演会	29.0	9.8
仕事	34.7	0.0
その他	4.4	13.7

### (3) 日中の楽しみごと

「日中の楽しみごと」について例示してたずねた結果は、表4のとおりである。

高齢者の1位は在宅型余暇活動である「テレビ・ラジオ」(74.4%)、次いで「新聞」(58.0%)と続き、第3位・第4位に積極的余暇活動である「散歩」(48.3%)、「おしゃべり」(47.7%)と続いた。次いで「仕事」(34.7%)と「読書」(34.7%)が続き、高齢者では仕事に3人に1人は従事していた。

超高齢者では、「テレビ・ラジオ」が(65%)と一位で、次いで、「散歩」(43.7%)、「おしゃべり」(43.1%)、「新聞」(42.2%)、「デイサービス」(32.4%)と続く。超高齢者では仕事をしている人はいなかった。高齢者・超高齢者ともに積極的余暇活動である「散歩」「おしゃべり」がともに40%台である。

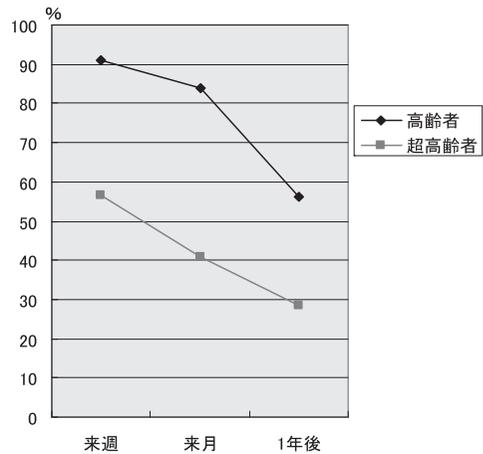


図2 時間展望の状況

### (4) 時間展望

未来をどの程度予想しているか、時間展望について、「来週」「来月」「1年後」の3区分で予定が考えられるか尋ねた。結果は図2のとおりである。高齢期と超高齢期には顕著な差がでた。高齢期は、「来週」(91.1%)、「来月」(83.9%)で肯定率は高かったが、「1年後」(56%)は半数程度の肯定率であった。一方超高齢期では、「来週」(56.6%)は半数を少し超えた程度、「来月」(40.7%)は4割程度と下がり、「1年後」(28.4%)の時間展望は3割を切った。「時間展望」は、高齢者と超高齢者には大きな差があることが判明した。

### (5) 老い観

5項目の「老い観」は表5のとおりであった。高齢者は、「老いた」感が63.3%とあるものの孤独感(13.6%)、時間の経過が遅い(14.2%)、無視される(10.1%)、余計者(5.9%)と、いずれも低率であった。超高齢者では、「老いた」感は92.8%とほとんどの人が感じており、次いで、「時間の経過が遅い」(32.1%)、「孤独」(26.8%)と続き、「余計者」(11.1%)、「無視さ

表5 古い観

項目	高齢者 割合 (%)	超高齢者 割合 (%)
孤独	13.6	26.8
時間経過遅い	14.2	32.1
無視される	10.1	3.8
余計者	5.9	11.1
老いた	63.3	92.8

れる」(3.8%)は低率であった。

### 3 老年的超越項目

老年的超越の尺度項目11項目について、「はい」1点、「いいえ」0点で分析した。

#### (1) クロス分析とカイ二乗検定

老年的超越各項目の肯定状況は、表6-1のとおりであった。

高齢者で高い項目は、「自分のすべてを受け入れられる」(81.1%),「亡くなった両親に愛情が増してきた」(81.1%),次いで、「若い頃より心が穏やかになった」(78.1%)であった。反対

に低かったものは、「物やお金に興味がなくなった」(10.1%),「表面的なことに関心がなくなった」(17.2%),「物思いにふけることに幸せを感じる」(37.3%)であった。

超高齢者では、「若い頃より心が穏やかになった」(82.7%),次いで「亡くなった両親に愛情が増してきた」(71.8%),「ささやかなことにも幸せを感じる」(70.4%)であった。反対に低かったのは、「物やお金に興味なくなった」(26.8%),「物思いにふけることに幸せを感じる」(43.0%),「表面的なことに関心がなくなった」(48.1%)であった。

この回答について、高齢者と超高齢者をクロス分析しカイ二乗検定した結果は、「亡くなった両親に愛情が増してきた」( $p < .05$ ),「自分のすべてを受け入れられる」( $p < .001$ ),「生かされていると感じる」( $p < .01$ )の3項目は高齢者の得点が有意に高く、一方、「表面的なことに関心がなくなった」( $p < .001$ ),「物やお金に興味なくなった」( $p < .001$ ),「死に対する恐怖心がなくなった」( $p < .05$ )の3項目は超高齢者

表6-1 2段階別「老年的超越」肯定状況

老年的超越項目	高齢者	超高齢者	Pearsonの カイ2乗値	漸近有意 確率(両側)
	割合 (%)	割合 (%)		
表面的つきあいに関心がなくなった	17.2	48.1	25.83	***
物やお金に興味なくなった	10.1	26.8	11.69	***
死に対する恐怖心がなくなった	39.1	54.3	4.41	*
亡くなった両親に愛情がます	81.1	71.8	4.82	*
自分のすべてを受け入れられる	81.1	61.7	11.31	***
生かされていると感じる	66.9	52.5	6.22	**
ささやかなことにも幸せを感じる	71.0	70.4	.34	
物思いにふけることに幸せ	37.3	43.0	.56	
過去のことが最近のように感じる	56.5	64.6	.55	
離れた兄弟・子供を近くに感じる	54.4	57.5	.02	
若い頃より心が穏やかになった	78.1	82.7	.23	
得点平均	5.92(SD2.24)	6.17(SD2.63)		

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

の得点が有意に高かった。「老年的超越」の合計得点では、超高齢者の平均は6.2 (SD2.6), 高齢者の平均は5.9 (SD2.24) で、超高齢者が高いものの有意な差は見られなかった。

## (2) 探索的因子分析

### ① 因子分析

「老年的超越」11項目に対して、探索的因子分析(主因子法・Promax回転)を行った。その結果、共通性が.1台と低かった1項目「死に対する恐怖心がなくなった」を除外して再度因子分析(主因子法・Promax回転)を行うこととし、この10項目で因子分析に適しているかどうかの検定「(KMO および Bartlett の検定)」を

行った結果(表6-2), 標本妥当性(Kaiser-Meyer-Olkin)は.72で、標本として望ましい数値と判断された。また、変数間の相関関係をみるBartlettの球面性検定の有意確率は.000で帰無仮説を棄却した。

この結果から10項目について再度因子分析(主因子法・Promax回転)を行ったところ、3つの因子が抽出された。

### ② 因子の命名

第1因子は、「若い頃より心が穏やか」、「生かされていると感じる」、「自分のすべてを受け入れられる」、「ささやかなことにも幸せを感じる」、「亡くなった両親に愛情が増してきた」の5項目で構成されており、自己の再評価や自我意識の変容に対する項目に高い負荷量が示されたことから、「自我超越」と命名した。第2因子は、「過去のことが最近のよう」、「離れた兄弟・子どもが近くに感じる」、「物思いにふける幸せ」の3項目で構成されており、時間や空間を超えた感覚に対する項目に高い負荷量を示し

表6-2 KMO および Bartlett の検定

項目		検定数値
Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測定		.72
Bartlett の球面性検定	近似カイ2乗	351.60
	自由度	45
	有意確率	0

表6-3 パターン行列

項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
若い頃より心が穏やかになった	.57	-.18	-.01	.34
自分のすべてを受け入れられる	.49	-.47	.03	.20
ささやかなことにも幸せを感じる	.44	.10	.08	.31
亡くなった両親に愛情が増してきた	.42	.20	.15	.24
過去のことが最近のようを感じる	-.14	.71	.05	.42
離れた兄弟・子どもを近くに感じる	.00	.69	.09	.50
物思いにふける幸せ	.18	.44	.12	.32
ものやお金に興味がなくなった	-.32	.01	.75	.42
表面的な付き合いに関心がなくなった	.07	.02	.57	.42
因子名	自我超越	宇宙的超越	執着超越	
因子相関行列				
	1	—	.57	.05
	2		—	.11
	3			—

表 6-4 尺度の信頼性

因子(項目)	因子名	Cronbach の $\alpha$	累積説明力	N
第1因子(5)	自我超越	.63	28.14	252
第2因子(4)	宇宙的超越	.63	41.64	251
第3因子(3)	執着超越	.60	53.77	252

ていたことから、「宇宙的超越」と命名した。第3因子は、「物やお金に興味がなくなった」、「表面的なことに関心がなくなった」の2項目から構成され、こだわりの減少に対する項目に負荷量が高いことから、「執着超越」と命名した。内的整合性を検討するために各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出したところ、「自我超越」で  $\alpha = .63$ 、「宇宙的超越」で  $\alpha = .63$ 、「執着超越」で  $\alpha = .60$ で、いずれも  $\alpha$  係数は高くないが、項目数が少ないことに起因すると推測されることから、 $\alpha$  係数は容認できる範囲として取り扱っていく。

Promax 回転後の最終的な因子パターン行列と因子相関及び共通性は表 6-3 のとおりである。また、下位尺度の信頼性は表 6-4 のとおりである。なお、この3因子で10項目の全分散を説明する割合は53.8%であった。

### (3) 下位尺度相関と $t$ 検定

#### ①下位尺度間の関連

これら3つの「老年的超越」下位尺度間の関連は、表 6-5 のとおりであった。「自我超越」下位尺度と「宇宙的超越」下位尺度は、正の有

表 6-5 「老年的超越」の下位尺度間相関と平均, SD

項目	自我超越	宇宙的超越	執着超越	平均	SD
自我超越	—	.40**	.00	.73	.28
宇宙的超越		—	-.02	.51	.38
執着超越			—	.34	.34

\*\* $p < .01$

意 ( $p < .01$ ) な相関がみられた。

#### ②高齢者・超高齢者別の相関

高齢者と超高齢者別に、「老年的超越」下位尺度の相関をみたところ、高齢者 (.302,  $p < .01$ ), 超高齢者 (.612,  $p < .01$ ) とともに「自我超越」下位尺度は「宇宙的超越」下位尺度と有意な正の相関が示された。

表 6-6 2段階別の相関係数

項目	自我超越	宇宙的超越	執着超越
自我超越	—	.30**	.05
宇宙的超越	.61**	—	-.10
執着超越	.06	.07	—

\*\* $p < .01$

右上: 高齢期, 左下: 超高齢期

#### ③高齢者・超高齢者間の差の検討

高齢者と超高齢者の差の検討を行うため、「老年的超越」の各下位尺度得点について  $t$  検定を行った。その結果 (表 6-7), 「自我超越」下位尺度 ( $t(252) = 2.47$ ,  $p < .05$ ) は高齢者に有意に高く、「執着超越」下位尺度 ( $t(252) = -4.79$ ,  $p < .001$ ) は超高齢者に有意に高いという結果であった。この結果は、項目ごとの  $\chi^2$  検定の結果をほぼ反映していた。

表 6-7 2段階の差の検討

項目	高齢期		超高齢期		$t$ 値
	平均	SD	平均	SD	
自我超越	.66	.03	.76	.02	2.47*
宇宙的超越	.53	.04	.50	.03	-.68
執着超越	.37	.04	.14	.02	-4.79***

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .01$

#### (4) 重回帰分析

3つの下位尺度を従属変数として、独立変数

表 6-8 老年人的超越 2 段階別重回帰分析

項目	自我超越		宇宙的超越		執着超越	
	高齢者 <i>t</i> 値	超高齢者 <i>t</i> 値	高齢者 <i>t</i> 値	超高齢者 <i>t</i> 値	高齢者 <i>t</i> 値	超高齢者 <i>t</i> 値
性別	-1.50	.04	-.82	.34	.28	-1.67
生活満足度	-1.69	2.38*	-2.24*	2.03*	-1.37	-.04
古い観	-.06	2.78**	-.04	3.01**	2.38*	.16
健康状態	-.12	-.96	-.92	-.58	-1.40	-1.73
地域愛着度	2.23*	1.19	2.08*	1.52	-.86	-1.54
時間展望	3.62***	3.67***	2.37*	3.70***	-1.51	-2.79**

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

は基本属性の「性別」と個人の意識特性を表す「健康状態」, 「生活満足度」, 「地域愛着度」, 「古い観」, 「時間展望」の6変数で重回帰分析を行い, 高齢者・超高齢者別に関連する変数をみた結果は表6-8である。

「自我超越」次元は「地域愛着度」( $p < .05$ )と「時間展望」( $p < .001$ )で高齢者に正の有意な関連がみられ, 超高齢者は, 「生活満足」( $p < .05$ ), 「古い観」( $p < .01$ ), 「時間展望」( $p < .001$ )と正の有意な関連がみられた。

「宇宙的超越」次元は, 「自我超越」次元と同じく, 高齢者では「地域愛着度」( $p < .05$ )と「時間展望」( $p < .05$ )に正の有意な関連が見られたが, 「生活満足度」( $p < .05$ )とは負の有意な関連が見られた。超高齢者では「生活満足」( $p < .05$ ), 「古い観」( $p < .01$ ), 「時間展望」( $p < .001$ )と正の有意な関連が見られた。

この結果から, 高齢者では「自己超越」次元, 「宇宙的超越」次元ともに「地域愛着度」と「時間展望」が高くなると超越傾向は高まり, 「生活満足度」が高くなると「宇宙的超越」次元は低くなるという関連が示された。

超高齢者では, 「自我超越」次元, 「宇宙的超越」次元ともに, 「生活満足度」が高く, 「古い観」も高く, 「時間展望」が高いほど超越傾向は

高くなることが示された。

一方「執着超越」次元は, 高齢者では「古い観」( $p < .05$ )と正の有意な関連が見られたが, 超高齢者では「時間展望」( $p < .01$ )と負の有意な関連が見られた。つまり, 高齢者は「古い観」が強いほど「執着超越」次元は高まるが, 超高齢者は「時間展望」が高まると「執着超越」を下げることを示された。

#### IV 考察

本稿は, 超高齢期における心理適応とその期の発達課題とされる「老年人的超越」の形成を検討するため, 65歳以上の高齢者を2区分したライフサイクルで考察した。J. Erikson (1997) がライフサイクルに第9段階を追加したのは自らの経験からであり, 実証研究から得られたものではなく, また, 彼女の第9段階の評価はBaltes (2003) 同様, 悲観的なものであった。

しかしながら, 本研究から明らかになった奄美群島の超高齢者は, 高齢者と比較すると身体機能面の低下は顕著であるが, 生活満足感や地域愛着度は高く, 日中の楽しみごと多様で, 古い観は高いものの孤独感や無視される感覚は低いなど, 心理面での適応は高齢者とほぼ同じ

ように高い状況にあった。以下、調査結果から現れた奄美群島の超高齢者の特徴を全国調査と比較して明らかにする。

超高齢期の対象者は平均年齢90.0歳で、そのうち一人暮らしは39.4%である。国民生活基礎調査(2009)では、85歳以上の単独世帯は男性10.8%、女性15.3%であるので、奄美群島の超高齢者の一人暮らしの比率はとても高い。この要因として、居住年数の長さ(平均71.6年)に加え、温暖な気候、隣人との絆(富澤, 2009b)が一人暮らしを可能にしていると考えられる。

暮らし向きは、「ゆとり」「ややゆとり」「普通」を併せて84.9%、「苦しい」「大変苦しい」は15.1%である。これを前述の全国調査(65歳以上の高齢者世帯)の回答と比べると、全国平均は「苦しい」「大変苦しい」が53.4%と半数以上である。全国との比較からは、奄美の超高齢者の経済的満足度は高い。しかしながら、「奄美群島群民所得」(奄美群島の概要平成18年度)からは、鹿児島県民との所得差は90.3%、国民所得との格差は70.8%の水準にあり、けっして豊かとはいえない。この経済的満足感の背景には、現金がなくても生活できる自給自足的な生活や近隣や子どもに支えられた生活からくる生活満足感の高さに起因することがあげられる(富澤, 2009b)。

一方「老年的超越」の形成においては、高齢者と超高齢者とは異なる要因が明らかにされた。つまり、カイ二乗検定および高齢者と超高齢者の差をみる $t$ 検定の結果からは、「老年的超越」の次元のうち、「執着超越」は超高齢者に有意に高く、「自我超越」は高齢者に有意に高いという結果が示された。

重回帰分析の結果からは、超高齢者では、「自我超越」, 「宇宙的超越」ともに、「生活満足

度」, 「老い観」, 「時間展望」が高いことが超越傾向を高めること、高齢者は「自我超越」, 「宇宙的超越」ともに「地域愛着度」と「時間展望」が高いことが超越傾向を高める反面、「生活満足度」が高くなると「宇宙的超越」次元は低くなるという関連が示された。一方、「執着超越」は、「宇宙的超越」, 「自己超越」と異なり、超高齢者では「時間展望」の狭まりが「執着超越」を高め、高齢期は「老い観」が強いほど「執着超越」は高まるという関連が示された。

このことから、第8段階の高齢者は「自我超越」の次元が認められ、新たに追加された第9段階の超高齢者は死を含めた物や表面的な関心からの減少である「執着超越」が有意な次元にあることが示唆された。この結果は、第8段階と第9段階の高齢女性を対象とした比較から、「老年的超越」は第9段階に有意とした先行研究を一部追認するものであった(Brown & Lewis, 2003)。これらから、身体的側面・心理的側面ともに超高齢者は前期・後期高齢者とは異なる高齢者集団であり、高齢者理解において第9段階を設定することの有用性が示されたといえる。

また本研究からは、Tornstam (1987) の「社会と個人の関係(積極的な孤独)」の次元は見出せなかった。これは、奄美群島の超高齢者は子どもや近隣に囲まれた依存型自立に幸せを感じることに関連していると思われる(富澤, 2009b)。

最後に、超高齢者の「時間展望」と「老年的超越」の関連について再考する。「時間展望」は、過去、現在、未来への指向性が含まれ(松田, 1996)、Erikson & Erikson (1997) は第9段階の時間見通しは1週間程度に狭まると論じている。河野(1998)は健常高齢者と虚弱高齢

者の主観的時間の比較から、虚弱高齢者の特徴は「未来指向性」を意識しないことであると論じる。

本研究では、「時間展望」の認識の高さと「生活満足度」の高さは「自我超越」次元、「宇宙的超越」次元ともに有意な関連を示し、一方で「時間展望」の認識が低いことが「執着超越」次元を高めることが示された。

つまり、「老年的超越」を構成する「自我超越」次元と「宇宙的超越」次元は「時間展望」が高いという未来志向性や「生活満足度」の高さというポジティブな要因と関連し、「執着超越」次元は「時間展望」が低下することが超越傾向を高めるというネガティブな要因との関連が明らかにされた。

一方で老い観の高さは、「自我超越」次元と「宇宙的超越」次元を高めている。これは老いを肯定的にとらえる人ほど自身の有用性を意識するとした先行研究（水上，2005）を肯定するものであった。

ローマの政治家キケロは、「自然がもたらすものに、悪いと考えるべきものは一つもない。老いもそのひとつである」と述べている。また神谷（2005）は、「安らかな老いに到達した人の姿は、……有用性よりも『存在のしかた』そのものによってまわりの人をよろこばし、気をゆるせる者のなかで、安らかにくらすことができれば、老いは自然にゆるやかな形で進行する」と論じる。

本研究の結果から言い換えるならば、超高齢者の内面世界には、加齢に適応する方略として、執着超越を核にする「老年的超越」の形成がみられることが示唆される。

## V 本研究の限界と今後の課題

本研究は奄美群島という限られた地域であり、また歴史的・社会的にも特別な背景を持つ地域であり、一般化には限界があろう。また、老年的超越下位尺度の信頼性（内的整合性）を示す Cronbach の  $\alpha$  は 3 尺度とも、少し低い値でもある。

しかしながら、大衆長寿社会を迎え、超高齢期を生きることは特別の人のものではなくなった今日、我々は超高齢期を生きる人を役割モデルとして、高齢期のそれぞれの時期を幸せに生きる術を学ばなければならない。高齢者の積極的な思いを受けとめ、長寿を寿ぐ成熟した超高齢社会の形成を築くために。

今後「老年的超越」尺度の精緻化を測り、他地域での更なる実証を深め、高齢者の幸福感を高める施策に寄与する高齢者研究の発展が望まれていると考える。

## 謝辞

本調査実施に当たって奄美市、徳之島町、宇検村、奄美群島広域事務組合の関係者の皆様、調査協力いただいた高齢者の皆様にお礼申し上げますとともに、調査全般にわたって、奄美の寅さんこと花井恒三さん、楠田哲久には大変お世話になりました。ここに記して感謝します。

## 注

- 1) 85歳以上を超高齢者として扱う研究は近年多くなっている。2002年発行の老年精神医学雑誌（第13巻第8号）では、「オールディストオールド」の特集が生まれ、疫学、遺伝、身体機能、認知機能、人格、精神疾患からの超高齢者研究を紹介している。英語では、oldest old, very old, extremely oldなどで表されるが、oldest oldが一般的である。

- 2) 百寿者研究は1976年の沖縄百寿者研究から始まり、1992年からは東京百寿者研究が進められ、100歳以上を百寿者と呼称することが定着してきた。
  - 3) Tornstam 理論を最初に紹介した小田論文 (2001) では、カタカナ表記で、「ジェロトランセンデンス」と紹介されているが、Erikson の第9段階では「老年的超越」と訳されており、本稿は、第9段階の発達課題を議論していることから、「老年的超越」と訳す。
  - 4) 奄美群島は、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の8島を指す。鹿児島市から東北端は376km、南端は592kmに位置し、離島の中でも特に遠隔地にある (奄美群島の概況〈平成18年版〉)。
- 文献**
- 秋山弘子 (2008). 『生涯現役を超えて』毎日新聞 (2008年3月16日付).
- Baltes, P. B. & Smith, J (2002). New frontier in the future of aging; From Successful Aging of the young old to the dilemmas of the Fourth age. *Gerontology*, 49(2): 123-135.
- Brown C, Lowis MJ (2003). Psychosocial development in the elderly; An investigation into Erikson's ninth stage. *Journal of Aging Studies*, 17, 415-426.
- Erikson, E. H. (1965). *Childhood and society (Second Edition)*. New York: Norton & Company, (仁科弥生訳: 幼児期と社会, みすず書房, 東京 (1997)).
- Erikson, E. H. & Erikson, J. M (1997). *The Life Cycle Completed; A Review (Expanded Edition)*. New York: Norton & Company, 151-190 (村瀬孝雄・近藤邦夫訳: ライフサイクル, その完結〈増補版〉, みすず書房, 東京 (2001)).
- 権藤恭之・古名丈人・小林江里香ほか (2005). 「超高齢期における身体機能の低下と心理的適応: 板橋区超高齢者悉皆訪問調査の結果から」『老年社会科学』27 (3), 227-337.
- 権藤恭之 (2007). 「百寿者研究の現状と展望」『老年社会科学』28 (4): 504-512.
- 鹿児島県 (2004). 『あまみ長寿・子宝調査概要報告書』.
- 鹿児島県大島支庁 (2006). 『平成18年度奄美群島の概要』.
- 鹿児島県大島支庁 (2009). 『平成21年度奄美群島福祉の概要』.
- 神谷美恵子 (2005). 『こころの旅』みすず書房.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2006). 『日本の将来推計』(平成18年12月推計 <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/>)
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2006). 『平成18年度介護保険給付実態調査結果の概要』.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2009). 『平成20年簡易生命表概要について』(平成21年7月16日発表) (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life08/index.html>).
- 厚生労働省 (2009). 『平成20年国民生活基礎調査の概要』(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa08/index.html>).
- 河野あゆみ・金川克子 (1998). 「在宅高齢者の主観的時間に関する研究: 性, 年齢, 日常生活自立度との見当」『老年社会科学』20 (1) 25-31.
- キケロー (2004). 中務哲郎訳『老年について』岩波出版.
- 水上喜美子 (2005). 高齢者の主観的健康感と老いの自覚との関連性に関する検討」『老年社会科学』27 (1) 5-16.
- Neugarten BL (1975). The future of the young-old. *Gerontologist*, 15: 4-9.
- 中島康之・小田利勝 (2001). 「サクセスフル・エイジングのもう一つの観点: ジェロトランセンデンス理論の考察」『神戸大学発達科学部研究紀要』, 6 (2) 255-269.
- 南海日日新聞 (2009). 「奄美の100歳以上長寿者, 10人増え140人」(平成21年9月12日付).
- 佐藤眞一 (2003). 「心理学的超高齢者研究の視点: P. B. Baltes の第4世代論と E. H. Erikson の第9段階の検討」『明治学院大学心理学紀要』第13巻, 41-48.
- 藪博明 (2004). 「いま奄美は: 日本復帰後の開発と自然・社会環境の変容」松本泰丈・田畑千秋 (編) 『現代のエスプリ別冊奄美復帰50年: ヤマ

- トとナハのはぎまで』至文堂, 101-110.
- Tornstam, L (1989). Gero-transcendence; A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory, *Aging: Clinical and Experimental Research*, 1(1): 55-63, Milan.
- Tornstam, L (1994). Gerotranscendence; A Theoretical and Empirical Exploration, *Aging and the Religious Dimension*. In L. E. Thomas & S. A, 203-225.
- Tornstam, L (2005). *Gerotranscendence; A Developmental Theory of positive Aging*, New York: Springer.
- 富澤公子 (2009a). 「ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」; 奄美群島超高齢者の実態調査からの考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2(2) 327-335.
- 富澤公子 (2009b). 「奄美群島超高齢者の日常からみる「老年的超越」形成意識」『老年社会科学』30(4) 477-488.
- Tomizawa kimiko & Masam Takahasi (2009). A Hierarchical Model of Gerotranscendence among the Oldest Old in the Amami Archipelago (*The Gerontological Society of America 62<sup>nd</sup> Annual Scientific Meeting* 第62回アメリカ老年学会発表).

Gerotranscendence in the eight and ninth stage of life cycle:  
A comparative study among the old and the oldest-old  
in the Amami archipelago

TOMIZAWA Kimiko \*

TAKAHASHI Masami \*\*

**Abstract:** The study compared the characteristics associated with gerotranscendence between those who were in the eighth stage (the old) and those who were in the ninth stage (the oldest-old) of Eriksonian psychosocial development. The participants were all community-dwelling elderly adults residing in two islands of the Amami archipelago. Despite the decline in physical functions, the oldest-old showed a relatively high psychological adaptation (e.g., high levels of life satisfaction and low levels of feeling lonely). An exploratory factor analysis extracted three psychological factors of gerotranscendence: cosmic transcendence, ego transcendence, and material transcendence. It was also found that the oldest-old scored significantly higher on material transcendence but significantly lower on ego transcendence than the old. Further, material transcendence was negatively correlated to “time prospect” among the oldest-old but was positively correlated to “the sense of feeling old” among the old. It was concluded that gerotranscendence is a multifaceted concept and that the old and the oldest-old may face different developmental tasks related to gerotranscendence.

**Keywords:** gerotranscendence, the Amami archipelago, the ninth stage of life cycle, the oldest-old, development tasks

---

\* Post-Master’s Research Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University

\*\* Associate Professor, Department of Psychology, Northeastern Illinois University